

## 14 《岩窟の聖母》

先に描かれたのはロンドン版である理由

2019

真鍋友範

結論から申し上げますと、ロンドン版《岩窟の聖母》は、ルーブル版《岩窟の聖母》よりも早い時期に描かれた作品だ。



《ロンドン版》1483～1490

レオナルド・ダ・ヴィンチ



《ルーブル版》1503～1506

アンブロジオ・デ・プレディスなど弟子達

\*ただし《ロンドン版》は、光輪と洗礼者ヨゼフの図像が描き加えられた後の《第三次ロンドン版》。オリジナルの《第一次ロンドン版》には、これらが無かった。(詳しくは、《岩窟の聖母》秘められた謎と新制作順仮説 2017 参照)

~~~~~  
まずは、《ルーブル版》が先と判断している多くの美術史家の意見に対する反論を提起したい。

ナショナル・ギャラリーに関連する学芸員、美術史家は【《ルーブル版》が（信心会からの実際の注文よりも）早い時期に描かれた】と判定しているが、これはいくつかの理由から誤りと考えられる。

確かに【ルーブル版】は、画面全体が薄明るく均等な光に満たされている上、画面の遠近に関わらず細部迄細密に描写されている点がレオナルドの受胎告知

同様に【レオナルド作品初期の特徴】を備えていると言える。

一方で《ルーブル版》には完璧な《スフマー技法》が観られると主張する学者もいるが、《スフマー技法》はむしろ【レオナルドの中盛期頃の特徴】である。

美術史家によってこれほど制作時期の判断が異なるのは何故か。

つまり一枚の絵の中に、レオナルドの初期の特徴と中盛期の特徴が同時に観られるのだ。

しかし、断言できることとして、一人の画家が一時期に描いた作品なら、絶対にこのような状況にはならないのだ。

また《ロンドン版》は信心会からの【注文時の条件】により近い表現とする美術史家もいるようだ。その為、《ロンドン版》がオリジナルの注文品と信じるナショナル・ギャラリーの学芸員は、《ルーブル版》の方が【注文時に既に同じ大きさで先に描かれていた】とする奇想天外な意見を述べられているようだ。

しかし、この説は到底考えられない説得力の無い意見だろう。

私には《ルーブル版》の方を、天才的デッサン力のレオナルドが描いた作品とは信じられない。デッサンがひどい出来なのだ。

ルネサンス当時は、弟子が描いても師匠の名前で作品を世に出していた。ヴェロッキ工房の《キリストの洗礼》を思い出してみるといい。工房の弟子達が中心的に描いた作品だが作者名はヴェロッキオだった。この例に観るように、レオナルドの弟子が描いたのが《ルーブル版》であったとしても、作者はレオナルドとして問題ないのだ。この意味ではそれが事実としても、現在ルーブル美術館に、レオナルド作《岩窟の聖母》とキャプションされていても、一応文句は言えないのだ。

繰り返すが、《ルーブル版》を実際に描いた画家は、やはりレオナルドではないのだ。

では、弟子だとしたら、いつ描く機会があったのか。

あるとしたら、それは弟子しか描けない期間が最有力だ。何故なら、レオナルドが直接監修したなら、あれほどのひどい内容にならない筈だからだ。

レオナルドがミラノから逃れた1499年から裁判の結審した1506年の間の7年間だ。(正確には第二次裁判提起の1503年より後のルイ12世からの注文後の約3年間) この期間、レオナルドは描く事は出来なかったが、オリ

ジナル作品はミラノに残されていたのだ。

先ほど《ルーブル版》はレオナルドの初期の特徴と中盛期の特徴を併せ持っているという結果であった。これを描いたのがレオナルドの弟子アンブロジオ達であったと仮定したら可能なのか。それならば可能なのだ。【弟子だからこそ師匠レオナルドから教わった内容を、過去も現在も合わせて盛り込んだ内容の絵画が描けた】のだ。

《ロンドン版》は【明暗法】のような近い強い光と陰の世界が描き込まれているが、これはルネサンス期の当時としては極めて先進的な表現であった筈だ。

レオナルドの弟子達もジョルジョーネの弟子ティツィアーノ程に優秀であったら、師匠と区別のつかない秀作を描いたのであろうが、残念ながらレオナルドの弟子達は、当時最先端の《明暗法》で描かれたオリジナルの《岩窟の聖母》を同程度に模写するだけの優れた感性と技能を持っていなかったのだ。

具体的に検証しよう。師匠レオナルドは《ロンドン版》で天使の足下を暗く描いている。ここには足が見えないことが自然であるとして、足は描いていないのだが、弟子は《ルーブル版》で画面を明るく変化させて描いた時、本来は見えていなかった天使の足先を間違った位置に描いているのだ。つまり、弟子は表現技術が未熟な為、デッサンの的に間違っても、それに気付かないで描いているのだ。レオナルドなら、このような人体構造に矛盾したデッサンを描くことは絶対に無いと断言できるのだ。

下図参照↓



《ルーブル版》天使の足下に注目



《天使の右足》の拡大図

\* 仮に、赤い○部分が天使の【左すね】ならば、左足先は、幼児の向こう側（黄緑の○部分）になる。（理由は、膝の上の衣服の外郭ラインが斜めだから。白の線部分に注目）

この場合、《天使の右足》は描かれた位置（青い○部分）ではなく、紫の○部分あたりに位置するので、見えない筈なのだが、実際は青い○部分に描かれている。これはデッサン上矛盾している表現だ。（右足が想定位置よりも下にある。）

仮に、赤い○部分が《右すね》ならば、【当然ある筈の《左大腿部》の描写が全く見当たらない】のだ。これもデッサン上変だ。

つまり、いずれにせよ、誤ったデッサン表現なのだ。

結論として、ルーブル版の天使の描写を見ると、レオナルドが決して描かないレベルのまずいデッサン表現なのだ。

レオナルドの弟子達は、通常の伝統的ルネサンス描画技法に従い、明暗法のような強い光と陰を意識せずに《ルーブル版》として模写しているのだ。

『画面が暗い』、『（光輪がなく）聖人としての趣がない』『イエスがどこか判らない』といった信心会側からの完成後の批判に、より合致しているのも、第二次裁判結果により、弟子アンブロジオが《光輪》を描き入れる前の、最初にレオナルドによって描かれた第一次《ロンドン版》だ。

結局のところ、『ロンドン版が先に描かれた』という結論にて、最も矛盾無く現在の制作順論争を収束できるのだ。

~~~~~

#### 参考

ウィキペディア・ジャパン 《岩窟の聖母》

《岩窟の聖母》秘められた表現と新制作順仮説 2017

レオナルドの真筆ではない《岩窟の聖母》ルーブル版 2019

《岩窟の聖母》の謎 ロンドン版・ルーブル版どちらが先に描かれたのか 2019